【論文】

『インドへの道』論（1）
――インドという意識――

磯　山　甚　一

The Sense of India in *A Passage to India*

ISOYAMA, Jinichi

要旨：E. M. フォースター作『インドへの道』は作者が第一次世界大戦直前にその当時英領であったインド亜大陸を訪問したことを契機にして書き始められたが、完成までには作者の個人的な事情も関係して長期間を要した作品である。彼が執筆を進めていたのはインド亜大陸に植民地支配から脱しようとする動きが活発になりつつあったころである。作者はこの作品を書く目的が政治的なものではなかったと断っているにもかかわらず、『インドへの道』はその当時のヨーロッパとアジアの植民地支配関係に色濃く彩られ、ヨーロッパ人のアジアの人々に対する考え方が浮き彫りになっている点では、政治的な小説である。本論考では、この小説においてごく当たり前に用いられている「インド」という呼称について考察を深める。手がかりは、題名「インドへの道」の意味と物語内容の齟齬、アングロ・インディアンという語の使用による「インディアン」の創出、ムガル帝国の記憶である。
キーワード：インド、ネイション、アングロ・インディアン、ムスリム、ムガル帝国

はじめに

今回は、『インドへの道』において「インド」とは果たして何なのか、という観点からその小説を読んでみよう。インド亜大陸を舞台にしたその

小説に登場する人々が、自分たちを果たして「インド人」として意識しているのか、集団（宗派、民族、国家、王国、帝国）の同一性を「インド人」として見出そうしようとしているか、それとも自分たちを「インド人」とみなすことなどはどうでもいいことなのか。「インド人」とされる個人はその物語の中にどのようにして登場しているのか。

歴史的知識としては基本的な事柄に属するが、20世紀初期の英国植民地統治下にあった「インド」とは、われわれが今日インドとして理解しているよりも広い地域を含んでいた。この地域が第二次世界大戦後に独立を達成するのに際しては、宗教を基盤にしていわゆる「分離政策」がとられ、かつての英領インドはヒンドゥー教徒を中心とする国家インドと、ムスリムを中心とする国家である東および西パキスタンに別れた。それら東西パキスタンもやがて分離して東はバングラディシュ、西はパキスタンとなったのである。

インド亜大陸に住む人々が、こうしてインドとパキスタンおよびバングラディシュという、近代の「国民国家（ネイション・ステイト）」を建設して独立を達成する過程では、宗教上の違いが重大な理由になって膨大な数の難民が発生したという、人々に大きな犠牲を強いる悲惨な歴史があったことはよく知られているだろう。『インドへの道』の物語が進行するのは、第一次世界大戦をはさんでこの地域に独立の意識が芽生え始めていたころ、これらの二つの宗教的勢力が同じ地域に互いに肩を寄せ合って生活していたころのことである。

作者フォースターのインドとのかかわりは1906年にシド・ロス・マスード（Syed Ross Masood）というムスリム青年とイギリス国内で出会ったことから始まる。その人物は植民地統治下の「インド」からイギリスにやってきてオックスフォード大学入学を準備していたのであった。フォースターはその異国の青年、まるで『アラビアンナイト』物語から抜け出してきたスルタンのように見える、堂々とした体躯の若者にプライベートな教師としてラテン語を教えて過ごした。

やがてフォースターは第一次世界大戦直前の1912年に最初のインド旅行に旅立つ。インドを題材にしてその小説を書いたのはその大戦前後のことである。第二次大戦を経てからは、全地球的に従属地域で独立の機運がもりあがり、インド亜大陸にもその風が吹き荒れた。そのような歴史的経過は、『インドへの道』の執筆時点でフォースターには予見不可能なことであった。彼にとっては、将来的にも、「インド」の「独立など思いもよらないこと、あり得るとしてもせいぜい非常に遠い将来の理想と考えていた」のであった[1)]。

長寿をまっとうして1970年に世を去った作者は、第二次大戦後インド亜大陸にもりあがった独立と、そして分離の成り行きに無関心ではなかった。1957年のEveryman's Library版には1ページの文章を寄せて、1924年の『インドへの道』出版後のインド亜大陸における変化の大きさを語っている。

彼が現地を訪れ実際に見聞して具体的に肌で知っていたのは、第1回旅行の年である第一次大戦を控えた1912～3年、そして大戦後、再度の旅行をした1921年のインド亜大陸であった。その1912年に彼が最初に訪れたときは、1910年から16年の任期にインド総督をつとめたハーディング男爵の在任期間中であり、1888～1937年の間で「インドが最も平和な時代」[2)]であり、「インドの政治舞台は比較的穏やか」だったのである[3)]。

1．題名となった「インドへの道」

・ホイットマンの詩

この小説の題名となった「インドへの道」という句がアメリカの詩人ウォルト・ホイットマンの同名の詩からとられたものであることは、作者自身が 'AUTHOR'S NOTE'（作者注）と題して記している[4)]。『草の葉』（1876年刊）に収められたその詩は、「スエズ運河の完成（1869）、大陸間を結ぶ鉄道の開通（1869）、大西洋を横断する海底電線の敷設（1866）な

どを祝ったもの」[5] であり、「西から東に通じる航路が開通した意味を強く主張している」[6] とされている。

「西から東に通じる航路」と言われているとおり、旧大陸ヨーロッパと新大陸アメリカを含む西側に属する詩人ホイットマンの詩の題名にあるその「道（passage）」とは、イギリス人を含むヨーロッパ人たちがスエズ運河を経由する航路をたどってインド亜大陸へと旅行するための「道（passage）」ということになろう。邦訳の「訳者解説」において、訳者の瀬尾裕氏がその詩の題名の意味を論じており、passage to Indiaが「長沼重隆氏は「印度への航海」、岩波文庫の鍋島・酒本両氏は「インドへ渡ろう」だが、そしてそのほうが正確だとは思った…」[7] とされているとおりである。だが、アメリカ人のホイットマンは確かに「インドへ渡ろう」と言いながら、太平洋を渡って行くのではない。わざわざヨーロッパを通過して、そこからその先の「インド」へ行こうと呼びかけているのだ。詩人は、ヨーロッパ人の目を通して「インド」を見て、ヨーロッパを通ってそこへ行く道が念頭にあることになろう。

デヴィッド・リーン監督による1984年の映画『インドへの道』は作中に登場する女性アデラがムア夫人に伴われてイギリスの港を出発し、船でインド亜大陸へ向けて出発しようとしているところから始まる。彼女はこれから自分が結婚するかもしれない男性と会うためにその亜熱帯の地へ向かうのである。渡航手続きをする彼女の胸は、遥かかなたにある未知の土地と、そこで自分を待つはずの男性に、期待にふくらむ。その映像では、「インドへの道」が、一人のイギリス人女性の個人的な経験に還元されているにせよ、彼女の旅行の意図にあいまいなところはなく、明確に表現されている。この映画は、この後もアデラの視点を観客の視点と重ねることを意図しているようであり、やがてアデラがその海のかなたの亜大陸へ行き、結局は相手の男性ロニーと結婚しないことにして再びイギリスに帰ったところまでを確認して終わっている。すなわち、一人のイギリス人女性が異郷で性的な幻覚に襲われたことによって経験する事件の顛末として、

終始一貫してまとめられている。その映画の物語において、「インド」とは、ムスリムやヒンドゥー教徒たちが生み出す異国趣味的な背景となり、一女性の性をめぐる経験を特異なものにするのに役立っている。

むろん、映画は2時間程度の時間的制約のなかで原作の要素をすべて取り込むことは不可能であるから、映画が上述のような観点からまとめたのは、それはそれとして納得できる（原作と映画はまったく別物と考えたほうがいい）。その映画の原作となった『インドへの道』は、始まり方からしてまったく異なる。小説の語り手は、すでにインド亜大陸の内部にいると想定される語り方で、ガンジス河流域に位置するチャンドラポアの自然の情景を描写する。最初に名前を与えられて登場する人物といえば、イギリス人ではなく、そこに住むムスリムの住民たち、アジズとその友人たちである。このように、小説『インドへの道』に登場するイギリス人たちは、「インドへの道」をすでにたどってきた人々であり、インド亜大陸の架空の小都市に落ち着いて生活をしている。映画で視覚的に見せていたような、「インドへの道」をたどるという行為に対応するものは、テクストにはない。

それどころか、小説のなかで描写されるのは、かえって、言ってみれば「インドから帰る道（passage from India）」をたどることを余儀なくされ、インド亜大陸を後にするイギリス人たちの姿ばかりである。まず、ムア夫人が息子のロニーに帰るようにうながされ、チャンドラポアから列車に乗り、中央インドの大地を通過し、ボンベイのヴィクトリア駅に到着する様子が描写される（CH XXIII）。夫人はその後イギリスへ帰るスエズ経由の航海の途上で息を引き取る。そして、遺体は水葬に付されるのである（CH XXVIII）。同様に「インドから帰る道」をたどるもう一人の人物が、フィールディング氏である。彼がエジプトを経由して帰っていく姿が語られる（CH XXXII）。フィールディング氏はもう一度「インドへの道」をたどって来るはずなのだが、そのたどっている姿は、われわれは眼にすることはできない。彼はその際にも、われわれの知らないところですでにその

亜熱帯の土地に滞在している。

そしてもちろん、ロニーとの婚約を解消したアデラの場合も、ムア夫人と同じルートを通ってインド亜大陸では列車に揺られ、海上に出てからは、海路エジプトを経由して帰っていく姿が描写される（CH XXIX）。彼女がエジプトを通過するときには、彼女のその旅がturn（向かう）ではなくて*re*-turn（もどる）であることが、東向きに立つレセップス像を引き合いにだして、わざわざ強調されている（p.231）[8]。彼女がいまたどりつつある道筋が*re*-turnであるためには、それ以前に何かの目的で行なうturnが、まさに「インドへ渡ろう」という意思を実現すべき「インドへの道」が、確かにあったはずなのに、そのturnのそなえる現実感は、この小説において徹底的に欠けている。リーン監督の映画では、まさに冒頭に表現される、異郷で待つ男性に思いを募らせ、船に乗ろうとする直前のあのアデラの表情――そこに集約される「インドへの道」をたどろうとする意思が、この小説には欠けているのである。

このように、小説『インドへの道』において、「インドへの道」、すなわちインド亜大陸へと「道」をたどる行為は、すでに行なわれた行為として、暗示としての行為にとどまる。だが、イギリス人たちは現にインド亜大陸に生活している。映画のなかのアデラにおいては、乗船手続きを済ませ、やがてボンベイの港に到着し、続いて列車に乗ってチャンドラポアに到着するという視覚化された明示的な行為であったものが、小説では具体的な行為としては現前していない。彼らイギリス人たちは、なぜか説明がないまま、すでに既成事実として、そこインド亜大陸にいるのである。彼らがどのような思いを抱きつつ「インドへの道」をたどったのか、その具体的な行為に即して場面が与えられていない。アデラとムア夫人でさえ、一方はロニーと結婚するために、一方は息子の結婚相手を連れていくために、それぞれ「インドへの道」をかつてたどったらしいことはわかるが、あくまでもそれはすでにそこに滞在していることの、単なる説明として提示されているにすぎない。

これは『インドへの道』という小説の内包する不可解な部分の一つである。すなわち、その題名の暗示することと、物語内容がすっきりと一致しない。ホイットマンは、「インドへ渡ろう」と言っているのに、作者フォースターは同じ語を用いながら、「インドから帰る」様子しか見せてはくれないようだ。もちろん、イギリスを出発してインド亜大陸へといたるべき「インドへの道」という「通路（passage）」があるならば、その通路は双方向性をそなえたものであるから、イギリスへ帰るときにたどるべき「インドからの道」でもあると答えることは、可能であろう。だがそれでは少々屁理屈っぽい。イギリス人たちは「インドへの道」をまさにホイットマンの言うとおり、「インドへ渡ろう」という意図をもって確かにたどったはずなのに、そのたどろうとする行為が過去にあった既成事実としてしか読者に提示されないのか、説明のしようがないからである。

・「反帝国主義者」フォースター

このように、題名（a passage to India）にある前置詞 to のかかえるこのような方向性の問題については、フーコーのいうイデオロギー的構築物としての「作者」フォースターを引き合いに出して考えることができるであろう。その問題が、文学作品の創造者として再構成された作者像とかかわりがあるとして説明する方法である。すなわち、そもそもイギリス人たちがインド亜大陸へと向かう明確な理由はないのではないか、はっきり言って、イギリス人がなぜそこに行かなければならないのか、理由はないのだ、ということを主張する作者像を導きだすのである。この点については、確かにつぎのような指摘があることを確認しておこう、すなわち、ホイットマンの「その詩は、題名を除けばこの小説と何ら共通点はない。実際のところ、その詩のなかで修辞的に表現される理想という理想が、どれもこれも虚偽であるとフォースターは意識的に暴露している」[9] と。

このようにして導かれる回答は、フォースターという作者に進歩派的な作者像を付与する結果となろう。すなわち、脱植民地化の思考が正当性を

獲得して主流を占める今日の知識人の世界につらなる作者として、「反帝国主義者フォースター」[10] という作者像を措定することになるのである。「作者」フォースターの像に、イギリス人がインド亜大陸へ行くべき明確な理由を見出せなかったという信念、「その帝国主義的事業全体が悲しむべき過ちであるという信念」[11] を重ね合わせる。その作者像を生み出したイデオロギーにしたがえば、この作者は、『インドへの道』の語り手をすでにインド亜大陸の内部に滞在している語り手として設定し、イギリス人たちがヨーロッパから「インドへの道」をたどる部分を、意図的に描写せずにすませたことになるのだ。確かに、この作品の語り手はいわゆる「全能の語り手」に近い存在なのであって、ほとんどどの人物の内面をも見通す力をそなえていることに特徴があるのだから、登場するそれぞれのイギリス人が、さかのぼった過去において「インドへの道」をたどりつつあった場面を生み出すことなど、その全能の語りで容易に可能であったはずなのだ。だが、『インドへの道』にそのような場面は見当たらない。

・同性愛者フォースター

フォースターをめぐるもう一つの作者像も、「インドへの道」という題名の謎にかかわらせうる可能性をもつ。すなわち、フォースター自身が事実として1912年にインド亜大陸に長期に滞在することを予定して「インドへの道」をたどったことと、その謎を関連させる可能性である。フォースターが実行したその旅の裏に潜んでいたとされる、その当時としては公開されることの許されなかった動機のことである。その動機はフォースター自身の同性愛的傾向に関係していたので、彼は自分自身が「インドへの道」をたどる真実の動機について、公的に明らかにすることはできなかった。実際のところ、彼がその道をたどった動機のひとつ――というよりも察するところ、おそらく最大の理由――は、ロンドンで知り合ってラテン語を教えて親しくなり、愛を告白した相手、「同性愛の対象でもあった」[12] ムスリムの友人（恋人）、あのシド・ロス・マスードに会いたいという思

いであった。映画『インドへの道』のなかで、これからインドへ向けて出発しようとする女性、あのアデラの表情に表現されているような切ない思い、と言えばいいだろう。作者が作中のあるイギリス人に言わせているように、植民地主義の考え方から言えば、支配者と被支配者の間のそのような「親密な交際は――だめだ、絶対だめだ」（p.141）と見られることを、作者フォースターはよく承知していたのである。

同性愛者というこの作者像を提示することにより、『インドへの道』の題名と内容に潜む齟齬は、その物語の執筆過程における作者個人の複雑な事情が顕在化したものとして解釈することが可能である。いわば、フロイトの言う夢の作業（dream work）のようなものを、作者の経験と、文学作品（＝顕在夢）のあいだに想定するのである。夢の内容に混乱が見られるのは、その夢の素材となった経験と、夢を生み出す過程において、何かしらそのような混乱を惹き起す事情があるからだ、と。

まずひとつの前提として、作者自身のインドへ渡ろう、「インドへの道」をたどろうとする自分の意図を、同性愛にかかわるところでは、秘められたものとしなければならなかった。『インドへの道』に「インドへの道」をたどろうとする自分の真実の動機を書き込むことは、同性愛を忌避する社会的禁忌に触れることだった。だが、作者みずからにとっては、どうしても避けることのできない真実であった。しかもその相手というのが、「親密な交際」でさえタブー視されている、植民地出身の若者であった。そこに言い知れないディレンマが介在したことは、十分に考えうることである。彼にとってせいぜいのところ可能であったのは、作品が出版されるときに、献辞としてマスードの名前をあげることくらいであった。

もう少し具体的に述べてみよう。彼が同性愛を主題とした小説『モーリス』を書いたのは、ちょうどインドへの第1回旅行を終えた直後のことで、その作品は1913年から翌1914年にかけて書かれたものとされている[13)]。『インドへの道』の執筆と『モーリス』の執筆時期は、ちょうど重なりあっていた。フォースターは1913年にインド旅行から帰って直後、『インド

への道』の最初の「かなりの量の章を書き上げた」[14)]。にもかかわらず、その物語の進行に行き詰まってしまう。その行き詰まりによって、彼は作者としての「深刻なディレンマ」に陥ったので、「もしも生き方を変えなければ、自分のキャリアが失敗に終わりそうだ」と感じ始めた。そのときに彼は、以前から会いたいと願っていた「エドワード朝の「預言者」、性改革の推進者エドワード・カーペンター」を訪問し、その訪問が劇的な効果をもたらした。かくて「突然おとずれた霊感により、同性愛を主題とする新しい小説を構想し」、「誰にも話さず」に、「多くの月日を費やすことなく」、小説『モーリス』を書き上げた（出版されたのは作者の死後であった）。

秘密裏に『モーリス』を書き終えた作者は、かくて、行き詰ったまま放置していた『インドへの道』を再度手がけようとした。だが彼は、『モーリス』は出版できないと知っていたので、たとえその小説を書き上げたとしても、出版するための小説である『インドへの道』を執筆するためには役立たないことがわかり、インドを題材とする小説の展望は依然として開けなかった。その小説に再度着手するまでには、第一次世界大戦後の1921年から22年にもう一度インド亜大陸を訪問した後の1923年を待たねばならなかったのである。かくて、執筆時における作者のこのような同性愛にまつわる困難が、『インドへの道』という作品の題名と内容におけるturnと*re*-turnの齟齬として顕在化している、ということになる。

・「インド人のための道」

やがてフォースターは、その「インドへの道」という題名について、いくぶんか弁解めいた言葉で言及したとされている。作者にとって、その題名そのものがずっと気がかりであったことの証左とも言えよう。すなわち、フォースターは「作品『インドへの道』について、イギリス人ばかりではなく「インド人のための道（passage for Indians）」でもあると語ったことがある。換言すれば、それ［インドへの道］は、ネイションとしての同一

性の探求とみなすことができるだろう」[15] と。つまりフォースターは、インド亜大陸に住みついている何億という途方もない数の人々が、「インド」という語を自分たちを表わす観念として獲得し、自分たちが「インド」なのだという意識を持つようになるための道でもある、と言いたいらしいのである。

フォースターはみずから、『インドへの道』を書くにあたって「政治的目的も、社会的な目的も主要な目的ではなかった」と述べている[16]。言い方はあいまいで解釈の余地はあるが、上述のような同性愛と関わる「個人的」な目的が含まれていたことを暗示する言葉であろう。だが、フォースターが後からであれ、この小説について「インド人のための道（passage for Indians）」という言葉を述べた事実は、明らかに政治的なニュアンスを含んで受け止められる結果になっただろう。最初は1913年に書き始められ、第一次世界大戦中の中断を経て1921年以後に書かれたという『インドへの道』であるから[17]、その執筆を手がけていたころは、のちに「インド」が国家として独立するまでに大きな役割を果たすことになるガンジーらの抵抗運動が始まっていた時期とちょうどかさなる（ガンジーが南アフリカからボンベイに帰着したのが1915年、「非暴力的抵抗運動（第1次サティヤーグラハ）」を始めたのは1919年である[18]。

ガンジー率いるその「インド国民会議派（the Indian National Congress）」の主張と、フォースターの「インド人のための道」という言葉は相通じるものがあると思われる。国民会議派の考え方によれば、「インド・ネイション」とは、すなわち「インド亜大陸の住人」であった[19]。ほぼインド亜大陸全体――現在のインドとパキスタン、バングラディシュを含む地域――を含むと考えていいだろう地域における、人種、民族、宗教に関わるきわめて大きな多様性にはひとまず目をつむっておくことが、おそらく英帝国に対抗していくために、その当時として緊急に必要だった。パキスタンとバングラディシュが分離した後の今日のインドについてさえ、「インドは世界でエスニック構成のもっとも多様な国のひとつである。多くの宗教

と宗派があるだけでなく、無数のカーストと部族の居住地であることはもちろん、いくつかの完全に異なる語族に属する主要十数種の言語集団と数百におよぶ少数派言語集団がある」（Encyclopedia Britannica）と言われるくらいなのだから[20]。「ネイション」は邦訳に際しては「民族」または「国民」と訳される語であり、「ナショナル」や「ナショナリズム」もこの語から派生している。インド亜大陸の住人を「インド・ネイション」とすることによって、インド亜大陸に住む多様な人々を「インド」というまとまりとして確立しようという運動だったのである。その運動はまさにフォースターの言う「インド人のための道」を探していた。

そのような現実世界におけるナショナリズムの高揚に呼応するような動きが『インドへの道』の物語に見ることができないわけではない。すなわち、アジズの裁判の結果としてそのチャンドラポアの地にヒンドゥー教徒とムスリムの宗教の違いを超えて盛り上がっていると語り手によって暗示される動きである。「裁判のその地域における（local）もう一つの結果は、ヒンドゥー教徒とムスリムの友好関係が生まれたことであった」（p.231）。もちろんそれは、チャンドラポアという架空の小都市内の出来事として、インド亜大陸全体からみれば極小の単位にすぎない「ローカル」な動きである。だが、『インドへの道』が政治的な目的をもって書かれたものではなかったとしても、イギリス人の存在に対抗する意識として、宗教的差異を超えた「インド」の目覚めを象徴する出来事として読むことが可能である。「インド」をネイションとしてまとめるための原理は、単に「インド亜大陸の住民」というだけでは、住民のあいだに浸透することは難しかったであろう。ヒンドゥー教、イスラム教、それぞれの単独でならば宗教的意識を基盤にすれば、まとまり意識は比較的に生み出しやすいはずのところで、『インドへの道』では、宗教的差異を超えた「インド人のための道」が、アジズ裁判の紛争を契機にして生まれることが暗示されている（現実の歴史はそう実現されることはなかったが）。

2．アングロ・インディアン

この物語における「インド」とは何かを考えるためのヒントがもうひとつ、「アングロ・インディアン（Anglo-Indian）」という言葉にあることをみておこう。ポスト・コロニアル的契機を経た今日から振り返って見たときに、『インドへの道』に登場する「アングロ・インディアン」とは何か、ということになる（フォースターの描いた「アングロ・インディアン」については、当のアングロ・インディアンたちから正しく描かれていないとして抗議がなされた。これは「表象」の問題としてあとで考えてみよう）。

・「アングロ・インディアン」と「アングロ」の記憶

20世紀初頭のインド亜大陸を描いた小説『インドへの道』において、その地で生活する人々として登場するイギリス人たちは、自分たち自身を指して「アングロ・インディアン（Anglo-Indian）」という呼称を用いている。チャンドラポアという架空の小都市で、ロニー・ヒースロップという青年がエリート官吏として働いている。その彼と結婚する予定でイギリスからやってきたアデラ・クエステッドが次のように言う、「ヒースロップさんと結婚することにより、わたしはいわゆるアングロ・インディアンとして知られているものになるわけです」（p.125）。「そのレッテルを私は避けられません」（p.125）。邦訳『インドへの道』でアングロ・インディアンは「在印イギリス人」という訳語があてられている。

もし結婚すれば、彼女はヒースロップ夫人という身分となり、その小都市に生活の拠点を置く「アングロ・インディアン」になるというわけである。この物語に登場するアングロ・インディアンたちは、その小都市チャンドラポアで主要な役職についている男たちとその夫人たちである。州長官（the Collector、収税官の意味）のタートン氏、治安判事（the City Magistrate）のロニー・ヒースロップ氏、州警察長官（the District

Superintendent of Police）のマックブライド氏、ミント病院長（the Civil Surgeon）のカレンダー少佐、官立大学長（the Principal of Government College）のフィールディング氏、これらの「アングロ・インディアン」たちが、チャンドラポアという「イギリス直轄領（British India）」（p.77）で「イギリスの統治（the British Raj）」（p.149）を行うために「行政官（administrator）」（p.77）として住み着いている。彼らは「インド高等文官（the Indian Civil Service）」の試験をパスして任じられた、エリート官僚たちだと考えていいだろう。彼らはその地の先住民たちを排除して彼らだけの排他的「クラブ」を作るなど、その都市内で集団を形成している。

インドに着いたばかりのアデラが将来自分はそうなるだろうとして用いたそのアングロ・インディアンという呼称であるが、Indianというだけでも、オックスフォード英語辞典（OED）によれば、「インドに住むヨーロッパ人、とくにイギリス人」という意味があった。このように、たんにIndianと言った場合でもインド亜大陸に生活の拠点をおくイギリス人を指すこともできた。だが、そこにAngloをつけてAnglo-Indianとすることで、指示対象がイギリス人であることはさらに明確になる。

たとえばAnglo-Americanと言った場合にアメリカに住むイギリス系の人を意味するのとちょうど同じ造語法であろう。しかし、Anglo-Americanの場合とAnglo-Indianは事情が異なる。アメリカの地にイギリス人が進出したとき、そこに先住民の定住人口はまばらにしかいなかったが、その進出を受けた土地は住民構成に重大な影響を受けた。アングロ・アメリカンたちが住み着いたその国土はその地の先住民たちの、累々たるしかばねと、否認と、そして排除の上に築かれたのである。アメリカ大陸で「支配下におかれた原住民は、さまざまな手段で絶滅あるいは離散へと追い込まれた」[21)]。

歴史の記憶をさかのぼれば、しかし、イングランドをその一角とするブリテン島自体がそのような異民族集団の侵略によって成立した国土でもあった。「アングロ・サクソン」の侵略があり、年代がさらにくだれば、大

陸からやってきて「アングロ・ノルマン」となった人々の侵略があった。さらには、今度は進出して行ったあとでその地で「アングロ・アイリッシュ」となった人々の記憶もある。「アングロ・アイリッシュ」の場合は、アイルランドに住む先住民たちを支配しようとイングランドからの侵略がおこなわれ、その土地に住み着いたイングランド系住民がいたということである。

Anglo-Indianという造語には、イギリス人たちがインドへやって来る前の、以上のような記憶が込められている。アングロ・インディアンの場合はしかし、広大な土地に定住する膨大な数の先住民たちを支配する一握りのイギリス人たちという点で、それまでの記憶とは違いがあった。「たとえばインドでは、1930年までに「たった四千人のイギリス人官僚が、六万の軍人と九万の民間人（その大部分が実業家と聖職者であった）に助けられつつ、人口三億の国に、身をおいていたのである」[22]。アングロ・インディアンとは、20世紀初期の当時の英帝国におけるもっとも重要な支配地であるインド亜大陸で植民地統治に従事する支配者側の人々としての、イギリス人たちの呼称である。『インドへの道』で彼らは単にEnglishmenと呼ばれることもあるが、Anglo-Indianと言うことで、上述のような文化的記憶がそこに込められることになる。アデラがその呼称に込められたmentality（p.125）を避けたいというのは、単にEnglishmenと呼んでは伝わらない、このような記憶との結びつきに言及したものと読めるだろう。

第二次世界大戦後に「インド」が国民国家として独立したことで、そのような呼称が用いられるイギリス人がインド国内に在住することはなくなった。アングロ・インディアンはいなくなって、インドに住むイギリス人は単なるイギリス人であるか、あるいはインド国籍を取得することがあるかもしれないので、単なるインディアンとなるであろう。アデラの言っている意味でのアングロ・インディアンは、インドの独立以後は廃語となっている。作者みずからが1957年に作品に付け加えたAUTHOR'S NOTEで、その語が今やアナクロニズムであると指摘しているとおりである

(anachronisms, . . . of ‘Anglo-Indian’)。

Anglo-Indianという語の歴史をたどれば、インド亜大陸の先住民とイギリス人との混血という意味もあった。たとえば19世紀初期の歴史に名を残した、「若きアングロ・インディアン（インド人とヨーロッパ人の混血）ヘンリ・ヴィヴィアン・デロジオ」[23] という人物がいた。大航海時代を経て17世紀から盛んになったイギリス人のインド亜大陸への進出の結果として、インド亜大陸の各地でこのデロジオのような混血の人々が生まれていたことは確実である。彼らは、ムガル帝国の支配するインド亜大陸に控えめなささやかな一歩をしるしたヨーロッパ人たちがその地に残した子どもたちであった。

しかし時代が下ると、立場が逆転することになる。ムガル帝国は衰え、ついには消滅し、イギリス人たちがかえってインド亜大陸を支配するようになった。「アングロ・インディアン」の意味もそれにつれて変化したであろう。「19世紀半ば以降、イギリス人にとってのインドでの物理的な生活条件が改善されたのにともない、イギリス人女性の同地での居住が推奨されるようになり、公務に就いているイギリス人エリートたちはインド人の妾をもつことを避け、イギリス人の妻を迎えるべきだ、と考えられるようになった」[24]。大航海時代以後にインドへイギリス人が進出したのは独身の男たち、あるいは妻を残した単身赴任であったが、19世紀半ばになると女性をともなう移住になってきたのである。その理由というのが、「支配者は現地人民衆から超然としているべきであって、そのようにすることで腐敗していないものと民衆から信頼され、また常人の意識からは縁遠い存在として畏れられることにもなる、というものだった」[25]。

イギリス人たちが近代初期に進出した当初は混血があったが、20世紀の初頭に『インドへの道』が書かれるころ、イギリス人女性アデラがアングロ・インディアンという語を用いるころになると、その語は生物学的な人種（レイス）や民族（エスニシティ）としての属性、すなわち「血統」に関する意味は重要ではなくなっていた。人は混血として生まれてアング

ロ・インディアンである場合もあっただろうが、アデラの場合は、ロニーとの法的な結婚によってアングロ・インディアンとなるか、あるいは結婚しないとしても、インドに住み続けることでアングロ・インディアンとなる。彼女の身体的特徴はインド亜大陸に住む先住民たちとは違う。血統から言えば彼女はイギリス人の白人女性であり、その意味は「アングロ」の部分が担う。日本語で言えば「イギリス系」ということになろう。

・アングロ・インディアンと「インディアン」の創出

ことさらに「アングロ」という語を付して用いるのは、イギリス人の記憶の中の「アングロ」の伝統があるためばかりではなく、アングロ・インディアンという語が流通することに、植民地社会における特別の意味があることを考えてみよう。もう一度再確認すべきことは、彼らが自分たちをアングロ・インディアンと呼んでいるとしても、それに対になる語彙として、総称的に「インディアン」と自分たちを呼んで自己の同一性を確認する人々の境界の明確な集団が、以前からすでにそのインド亜大陸にいたわけではないことである。つまり、「アングロ・インディアン」という呼称が生まれたのは、「インディアン」という既存の実体の認識を前提として、その認識を基盤にして新たに造語されたからではないと判断すべきであろう。20世紀初頭に書かれた『インドへの道』のなかでも明確に述べられているとおり、「総称的にインディアンと言えるような人が実在するわけではないのです」（p.232）。

そして、そのような総称的なインディアンに対応するべき単数形の、輪郭の明確な「インド（India）」もありえない、というのがこの小説が最終的に到達する認識である。すなわち、ムア夫人は息子のロニーに帰国をうながされて列車に乗り、ボンベイに到着して考えた、「百通りものインディア（the hundred Indias）」があるのだ、と。ムア夫人が複数形のIndiasとして呼ぶべきだと考えた対象であるものを、単に単数形のIndiaとして呼んだとたんに、その言語行為はムア夫人が鋭敏に感じ取ったような多様性、

複数形のインド（Indias）を消去してしまい、アングロ・インディアンたちの眼には、単数形のインド（India）しか目に入らなくなるのである。ムア夫人が用いる複数形のIndiasは、物語の最初のころにも出現していた。アジズの思いを代弁する、語り手の言葉である、「戸外には冷淡な月の光を浴びてインドが――百通りものインド（a hundred Inidas）が――広がっていた」（p.8）と。

インド亜大陸というその土地に遅れて進出して行ったヨーロッパ人の一部が、自分たちをアングロ・インディアンと呼んだことは確かである。その呼称を使い始めたのは、当初は、そこにすでに住み着いていた先住民の人々と、自分たちを何らかの方法で区別する必要があったためであろう。『オックスフォード英語辞典』（OED）によれば、その語の初出は1826年である。しかしその事実は、「アングロ・インディアン」という語がつくられる前に、「インディアン」という語が明確な実体をともなって、すでに十分に浸透して流通していたということを意味しない。つまり、「インディアン」という語が、「アングロ・インディアン」という造語の基盤となるために、実質的な意味をそなえていたわけではないだろう。

なぜなら、すでに見たように、20世紀の初頭のフォースターが生み出した語り手にとってさえ、総称的に名づけることができるような「インディアン」など実在しないと見えたからである。集団として実体があったのは、ムスリムやヒンドゥー教徒と呼ばれる宗教的勢力であっただろうし、「グルカ族、ラジプット族、ジャット族、パンジャブ人、シイク教徒、マラータ族、ビル族、アフリディ族、パターン族」（p.159）などと呼ばれる人々である。彼らは自分たちのことを「インディアン」と呼ばれても、何のことかわからなかったのではないか。

「インディアン」と「アングロ・インディアン」をめぐっては、話はまったく逆だと考えればいいであろう。すなわち、一方の側が自分たちを「アングロ・インディアン」と呼ぶことで、「アングロ」のつかない総称的に「インディアン」と呼ばれる人々を、集団的な実体として生みだす作用

をしている、ということである。「アングロ・インディアン」という呼称を用いれば、その語が指示する対象は極めて明確に限定できる。『インドへの道』では、その語と同じ人々を指示するために、the English（たとえばp.152）や、Englishman（たとえばp.161）、Englishwoman（p.203）という語が用いられている。そして、アングロ・インディアンとの関係で言われた「インディアン」とは、イギリスの統治のもとに服している人々、ということになろう。

さらに、「アングロ」は地域的な暗示として「イングランド」を明示的に示すであろう。だが、それと同じような暗示で、「インディアン」という語の使用が、その前提として限定的な地域概念の「インド」を持っていたとは考えられない。なぜならば、よく知られているように、「インド」とは、古代、中世以来、ヨーロッパから見て漠然と「東方」を指し示す語として用いられていた[26)]。『インドへの道』が明らかに述べているとおり、ムア夫人が船上で息を引き取り、慣習にのっとって水葬によって葬られたインド洋でさえも、同じ「インド」なのである。「彼女の遺体はもう一つのインド、すなわちインド洋の水のなかに沈められた」（p.222）。

かくて、アングロ・インディアンという名称がその亜大陸で流通することでもたらされたのは、アングロ・インディアンとインディアン、これら二つの語における、両者の差異の意識であった。アングロ・インディアンである自分たち以外の人々は、現実にはその人々の間に限りない多様性があるはずなのに、それらの多様性を捨象して総称的に「インディアン」として彼らには見えてしまう結果をもたらした。そして、インド亜大陸の先住民たちを総称的に指し示す記号として「インディアン」という語を用いるたびに、そのインディアンと自分たち自身を区別しておくべき差異を生み出すための、心理的空間が出現するのである。結婚することでアングロ・インディアンになるというアデラの発言を聞いて、アジズが思わず口にする、「そんな恐ろしい言い方は取り消してください」（p.125）という反応は、自分がアングロ・インディアン以外の者、すなわちインディアン

として一括して呼ばれることへの抗議の表れであろう。

そうして出現する差異は、さまざまな意味に満ちた空間として意識されることになるであろう。ひとつには、たとえば、「支配者は現地人民衆から超然としているべき」[27] と言われているように、「支配者」と「被支配者」の差異を表わすことになる。『インドへの道』では、「従属する種族（subject race，p.6）」という語や、とくにイギリス人を意味して用いられた大文字の「支配する種族（the Ruling Race）」（p.54）という語があり、それらが対になる。イギリスによる統治（the British Raj）のなかの、社会的構造についての意識である。当然のことながら、アングロ・インディアンの側の優越意識となっている。

言うまでもないことだが、アングロ・インディアンが本質として「支配者」としての属性をそなえるわけでもないし、それ以外の人々、すなわちインディアンが本質として「被支配者」としての属性をそなえているわけでもない。最初に、両者に差異があるという意識があればいい。アングロ・インディアンとインディアンという対に、「支配者」と「被支配者」という対が張り付くことが重要な結果をもたらすのである。これは、歴史的経緯を基盤にして生まれたとされるべき意識である。ヨーロッパ人たちは、数々の暴力的な過程を経て、インド人たちに対して優越的な立場を築いてきた。その結果として、「白人の優越」とともに、「白人以外の従属」という意識が対になって生まれたのである。「白人の優越性という考え方…これはアフリカ人やアジア人に対する暴力的な抑圧なくして成立しなかった」[28] と言われるとおりである。

このような意識が生み出した帰結は、アングロ・インディアンという語との関連でいくと、彼らアングロ・インディアンたちが、その土地の先住民である人々と社会的にも、エスニックな面でも同化はありえないと想定されるようになっていくことである。イギリス人とインド亜大陸の住民との間の混血をも意味していた「アングロ・インディアン」が、差異の意識の浸透とともに、インドに住むイギリス人という側面が強くなっていった

ということである。「たいていのイギリス人男性は自分たちと同種の女性を選んだ。出かけてくる女性の数がどんどん増大していたので故郷風の生活も年を追って可能になっていった」（p.51）。

インドでの仕事が終われば、「イギリス人インド高等文官たちは、退職後は、その大半がイギリス本国へ帰還した」[29]。『インドへの道』のアデラもその夫となるはずのロニーも、自分たちが行政官としての仕事を終えた退職後も引き続きインドに住み続けるだろうとは想定していないと考えていいだろう。彼らはもしも結婚して子どもが生まれることになれば、その子弟の教育は自分たちの故郷の教育機関、できればパブリック・スクールやオックスフォード、ケンブリッジなどに送って行ない、自分たちもいつの日かは故郷に帰る予定なのである。インドに彼らがいま住んでいるのは、仮のこと、一時的なことにすぎない。彼らはインド高等文官（Indian Civil Service）などの登用試験に合格して官僚となり、インド亜大陸におかれた一地方部局に本国政府のインド省から派遣された任期のある行政官なのである。「インド担当大臣の下で勤務するインド省官僚たちも、イギリス本国の官僚制度の主要な一角を」なしていた[30]。

このようにして、いったん差異が現実のものであれ想像上のものであれ心理的な空間として生み出されると、こんどはそれが維持すべき差異として、さらに具体的な行動によって確認すべき対象となっていくのである。その差異の観念は、もちろん、社会的な制度だけにとどまらないことはいうまでもない。もうひとつの例をあげるとすれば、両者の身体的特徴にもその差異が投影されていくのである。『インドへの道』では、アングロ・インディアンとインディアンの身体的特徴にも対照させられて言及があり、肌の色については、きわめて直接的な語が用いられている。すなわち、「黒みがかった種族（the darker races，p.189）」と「白みがかった種族（the fairer race，p.189）」である。これらの英語は「どちらかと言えば黒っぽい」と「どちらかと言えば白っぽい」という意味であるが、邦訳ではそれぞれ「膚の黒い人種」、「膚の白い人種」という対照になる。「白人」という場合

に、white raceが用いられていることの影響で採用された訳語であろう。白と黒という対であるから、これ以上に明確な対照はないといっていい。

もちろん、『インドへの道』にも明確に述べられているとおり、色彩上のこの対照は実際のところはそれほど截然としたものではない。インディアンの側にもさまざまな血統があるから、彼ら相互にも膚の色には違いがある。アングロ・インディアンとインディアンの違いは「黒」と「白」というほど際立った対照ではないのだが、いったん差異意識が固着して内面化した個人の眼から見ると、その差異がどうしても黒と白の際立った対照となって見えてしまう。だから、そのような意識が普通になったイギリス人たちのあいだで、一人のイギリス人が「いわゆる白人は実際のところはピンクがかった灰色なんだ」（p.50）というような発言をするやいなや、その人はイギリス人たちのクラブでたちまち評判を落とすことになるのである。小説中にはこの黒と白の対照が色の対照などではなくて差異意識が投影されたものであることを気づいている言明もある。すなわち、「この場合の「白」は色彩とは何の関係もない」（p.50）。

・イギリス人女性「暴行未遂事件」の意味

『インドへの道』ではこのようなアングロ・インディアンが差異を維持しようとしている意図をよく表わす言葉が表明される。現在は地方長官（the Collector（収税官））という地位に就き、この土地に来て25年間の経験があるというタートン氏が、「この25年間にわかったことは、イギリス人とインド人が社会的に親密になろうとすれば、かならず、悲惨な結果になるということなのだ。付き合うのはいいですよ。礼を尽くすことは大いに結構。だが親密な交際は――だめだ、絶対にだめだ」（p.141）と言う場面である。

そのような親密な交際が、この物語では実際に「悲惨な結果」を惹き起すことになる。当事者となるのは、アジズとアデラである。アジズが計画したピクニックにアデラとムア夫人が招待されて出かけたときのこと、ア

ジズはそのアデラに洞窟のなかで暴行しようとしたとの疑いで逮捕され、アデラの訴えによって刑事事件として起訴されて裁判にまで発展していく。その事件の成り行きは、チャンドラポアの都市全体の住民を巻き込むまでにいたり、また、この物語全体においても中核を形成している。この事件によって、アングロ・インディアンとアジズを含む都市住民たちとの亀裂は決定的になり、結局はこの都市におけるイギリス人の支配が危機にさらされるという成り行きである。アングロ・インディアンをめぐって考察してきた結果から、この事件の意味を読み解いてみよう。

この暴行未遂事件とされるものが物語の中核となっているにもかかわらず、小説『インドへの道』において、セクシュアリティの言説は全体的に注意深く抑制されている。アデラはロニーの妻になるつもりでインドへ来ているのに、必ずしもロニーに対する情熱があるようには描かれない。ロニーがインド高等文官（らしい）という高給取りのエリート官僚であることは、結婚市場で魅力のある男性であったかもしれない。しかし他のフォースターの小説に登場する女性たちが結婚と恋愛の情熱を結びつけて考えていることを思い起こせば、アデラとロニーはうまくいかないらしいというのは最初からフォースターの読者の予想のなかに含まれている。「ミス・クエステッドはイギリスにいるときにロニーをよく知っていたが、彼の妻になる決心をする前に彼を訪れるのはいいことだと思った」（p.66）。二人は当初から互いに冷淡で、どちらも一度は相手と結婚しないことに決意していたが、なんとか親密さを取り戻して再び結婚を意識するようになるのは、二人が暗闇の中を走るクルマのなかで隣に座り、二人の手と手が触れ合ったという場面なのである。

洞窟内での事件は、現行テクストではそもそもその場面自体が存在しない。この物語のもうひとつ不可解な部分である。マラバールの洞窟見学にでかけた際、アジズはムスリムの結婚に関するアデラの問いかけに傷ついて、少しの間アデラと離れて心を落ち着けようとしている。アデラが一つの洞窟に入る。彼が気配のないことに気づいてアデラを探すが、彼女の姿

が見えない。彼はしばらく彼女を探したが見つからず、やがて、山すそで自動車に乗ろうとしている彼女の姿が目に入ってくる、というだけである。アジズは何が起こったのかわからないまま（読者にもわからない）、この後で列車に乗ってチャンドラポアに帰るが、駅に到着した途端に、暴行未遂の容疑で現行犯逮捕されるのである。

フォースターの草稿段階では、その暴行事件の起きた洞窟内の場面が存在した。にもかかわらず、出版段階の完成稿でその場面が削除されたことがわかっている。草稿に描かれたその場面についての説明を引用してみよう、「読者がアデラとともに洞窟に入ると、彼女を壁に押し付けて彼女の胸をつかもうとする手が伸びてくる。われわれもまたその暴漢を双眼鏡でなぐりつけ、洞窟を抜け出して山の麓へ駆け下りていく」[31]。このような成り行きを描写する場面は、現行テクストでは削除されており、これにあたる時間帯にマラバール洞窟の内側でいったい何が起こったのか、テクストに手がかりは一切ない。語り手は沈黙している。

この事件を「アングロ・インディアン」という語との関わりで考察するとどうなるか。洞窟内の出来事がはたして事実は何だったのか現行テクストは何も明らかにしないが、物語の中核となる事件の真相が明らかにされないまま語りが進行するのは、小説のつくり方としては珍しいことではないだろう。ただし、この物語の場合には、その事件があったのかどうかさえ明確にされない。当のアデラ自身がよくわからない。彼女自身が、後になってから、「ガイドだということにしておきましょう」「決してわからないでしょう」（p.228）と言うからだ。最終的には、アデラが裁判の場面でその訴えを取り下げたことによって、それは結局「幻覚（hallucination）」（p.207）であったことになっている。しかし、幻覚説にせよ、ガイド犯人説にせよ、アデラにとって自分が男性の欲望の対象になったということが、一時的にせよ、裁判に訴える手続きを始めるために十分なだけのリアリティがあったことになっているのだ。

しかしこの謎を解く手がかりは別のところにありそうだ。この一連の事

件のなかでひとつだけ確実なことがある、というよりも、想定外とされていることがある。すなわち、その洞窟のなかでアデラを襲ったのは、アングロ・インディアンではない、ということである。容疑者がアジズにせよ、ガイドにせよ、あるいは「パタン人連中の一人」（p.210）にせよ（パタン人とは、インド国内と西北国境に住むアフガン族）、アングロ・インディアンは犯人として想定されていない。犯人だとされているそれらの人々は、すべてインド亜大陸の住民たち、この物語で「インディアン（Indian）」と呼ばれている人々のうちのだれか一人なのである。

結局は「幻覚」であったかもしれないが、彼女にとって、薄暗がりの洞窟の中に一人足を踏み入れたとき、その薄暗がりの中において、その「インディアン」の存在は、彼女が自分の身体に実際に触れられたと感じるのに十分なくらいの確かなリアリティがあったのだと言えよう。そのことは、彼女がその洞窟から逃れて仲間に助けられ、ミス・デリックが乗ってきたクルマに乗り込んだ場面からわかるのである。そのクルマに乗り込むと彼女は、そのクルマを運転していた「インディアンの運転手が我慢できなかった。『その人をどっかへ連れてって』と叫んだ」（p.145）。ところが、すでに本論で見てきたように、総称的に「インディアン」と呼ばれるような人は存在しないのであった。存在するのは、その総称的な「インディアン」を生み出すために、自分たちアングロ・インディアンとの差異としてイギリス人たちが付与した、「インディアン」に付随するさまざまな属性なのである。

アジズは言う、「やつら［アングロ・インディアン］はすべて同じになってしまう。ひどいとか、ましだとかはありえない。タートンだろうが、バートンだろうが、名前の文字がひとつ違うだけだ。イギリス人の男たちは2年間でそうなる。そして、イギリス人の女たちは半年だ」（p.4）と。アングロ・インディアンたちが、多様なインド（Indias）を見ることができなくなり、自分たちが作り出した単一の「インド」しか見えなくなってしまうのに費やす歳月が、男なら2年、女なら半年、ということである。

アデラを洞窟内で襲った「幻覚」は、そうすると、イギリス人たちが自分たちで勝手につくりあげた「インディアン」像が作用した結果の幻覚であった。すなわち、警察長官マクブライド氏がアングロ・インディアンの考えを代弁して述べるとおり、「膚の黒い人種は白い人種に肉体的に惹かれる、しかしその逆はありえない――これは怨恨から言っているのではなく、また悪口でもない、科学的観察者なら誰でも認めるであろう事実である」（p.189）[32] というときの、「膚の黒い人種」がインディアンであることを、アデラ自身が見事に内面化し終わっていることを示すことになるであろう。

3．ムスリムとインド

『インドへの道』を21世紀の今日の日本に生きるわれわれに結びつける一本の糸がイスラム教であることは最初に確認したとおりである。この小説に登場する人物たちの宗教のうち、アジズの信仰する宗教がイスラム教であり、彼はこの物語のなかでイスラム教を代表している。アジズがこの物語で大きな役割を果たすだけの人物に仕上げられている事実は、インド亜大陸のムスリムについてそれだけ作者フォースターが詳しく知っていたという事情があるからであろう。「アジズはシド・ロス・マスードへの愛惜表現であった」[33]。すなわち、彼の同性愛の対象であり『インドへの道』を献呈した相手シド・ロス・マスード、その人がまさにムスリムであったことが大きく作用していたのは間違いない。

ただし、アジズの信仰するイスラム教について、その信仰の内実がどのようなものなのか、この『インドへの道』物語を読んでも読者には理解できない、それどころかほとんど触れられていない、と言っていい。彼は宗教心の篤いムスリムとして登場するにせよ、その信仰の内実は直接触れられずに暗示されるにとどまっている。つまり、アジズはヒンドゥー教徒ではなく、キリスト教徒でもない、それら両者とは差異があるという意味で

のムスリムであって、彼のイスラム信仰の内容はわからない。フォースターとシド・ロス・マスードとの親密な関係を考慮してみれば、アジズの信仰に具体性が欠けているのは、これもまた不思議な現象である。さらに言えば、イスラムの信仰の名のもとにたとえ生命を賭してでも行動するというような、「精神的にいってちょっと地層が変わっている」[34] という印象を今日の中東諸国に関する報道が与えているのは確かだが、アジズの信仰はそのような印象のないイスラム教のように見える。

そのイスラム教という糸をたどることによって、この物語はインド亜大陸の歴史をさらにさかのぼり、かつてインド亜大陸を支配したイスラム教の帝国、ムガル帝国の記憶へと結びつく。アジズが盛んにその記憶から知識を披瀝しているからであるが、それは同時に作者フォースターが抱いた関心でもあったことを暗示する。この宗教と「インド」意識が『インドへの道』においてどう関連させられているのかをみておこう。

・ムガル帝国の記憶

まず明らかになることは、アジズが歴史的な思考を重んじており、インド亜大陸という大地を舞台にした歴史があったこと、その歴史の地層のうえに現在があることを意識しており、歴史的意識をそなえた教育を受けた知識人だということである。ムガル帝国という、自分の宗教に属する人々が築いた過去の栄光への郷愁と言ってもいいかもしれない。

彼がこの物語のなかでイスラム教徒として顕著な役割を果たすのは、イスラムの帝国であったムガル帝国の記憶を代弁するときである。たとえば、彼がイギリス人の女性たちとマラバール洞窟へピクニックに出かけたとき、自分が招いた賓客としての彼女らに向かって彼は語る、自分の血筋をたどると、かつてインド亜大陸にアフガニスタンから侵入し、そこでムガル帝国を興して支配した皇帝たちの時代にまでさかのぼり、自分は皇帝たちに身近に仕えた側近の末裔だ、と。「なんだかバブール皇帝にでもなったような気がします。…私の祖先はバブール皇帝といっしょにアフガニスタン

から来たのです。ヘラトで合流したのです」（p.123）。こうして彼は自分とバブール皇帝を同一視する。

彼がそうした立場から言っていることを、インド亜大陸の歴史に即して整理してみよう。イギリス人はムガル帝国のインド亜大陸支配が弱体化していたところに進出したもので、すでにその地に存在していた帝国を引き継ぐものであったと理解していいだろう。ムガル帝国を英語で表わすとMughalまたはMogulとなり、ペルシア語とアラビア語を起源とした語で、その語源をさらにさかのぼればMongolにつながる。すなわち、「「ムガル」というのは「モンゴル」と同じで、モンゴル人のバーブルが建てたムガル帝国は、すなわちモンゴル帝国なのである」[35)]。

アジズが言及しているバブールが皇帝を宣言してムガル朝を興したのは1526年のことで、イギリス人が最初にインド亜大陸にやってきたのはその後まもなくのことであった。かつてモンゴル人がヨーロッパに侵入して東西の歴史がつながったと同じように、今度はヨーロッパの側が東に進出していわゆる「世界史」の登場となったのである。ホイットマンが「インドへ渡ろう」と歌うずっと以前からヨーロッパと「インド」は相互に渡り合える関係にあったのだが、近代以後はほとんど「インドへ」向かう一方通行の関係になっていく。1600年には「イギリス東インド会社」が設立され、1611年には商館を開設した。イギリス人たちはそのムガル帝国体制下のインドで許可を得て各地に商館を開き、交易許可を獲得するなどの活動をしていたのであるが、次第にインドの政治的な支配そのものに手を伸ばし、19世紀の半ばになると、「最後のムガル皇帝バハドゥル・シャー二世は一八五八年、英国によって廃位され、ヴィクトリア女王がインド皇帝となった」[36)]。かくてインド亜大陸は英領インド（British IndiaまたはAnglo India）として英国の植民地統治下に入ることになった。

イギリスが進出するまでにインド亜大陸の全体を政治的に統合したものとしてまとめて呼ぶ呼称があったとすれば、それはインド亜大陸の大部分を統合したムガル帝国の「ムガル」であって、「インド」ではないだろう。

スエズ運河が完成したのが1869年、ホイットマンが「インドへ渡ろう」と歌ったのが1871年で、そのときすでにムガル帝国は滅びていた。そこにあったのは、イギリスの帝国主義的支配下でBritish Indiaと名づけられた「インド」だったのである。

アジズはこのように自分が今生活を送っているインド亜大陸に対して、その大地を外側から見るという視点を持っており、その視点とは、インド亜大陸に彼の属するイスラム教徒のグループが侵入し、その地の先住民に君臨して支配階級を構成したことを確認することで初めて獲得できるものである。それは過去にバブールとイギリス人が侵入しようとした大地を見たときと同じ「帝国主義」に沿った考え方と言っていい。「帝国」とは、一つには、「他民族を支配し」ようとする国家、その土地の住民など「他の権力に制約されない世界権力」なのである[37]。

ムガル帝国はそういうわけで「インド」と同じではない。帝国主義者的な視点をそなえた、支配を志向する人々と自分を同一視するアジズにとって、「インド」とは、征服され支配されるべき対象だったのである。アジズはムガル帝国の帝国主義的イデオロギーを、その侵略者の側に立って承認しており、かくて次のように言うことができる、「デカン地方のバラモンが言っていることをご存じですか？　イギリスは自分たちからインドを奪った――いいですか、自分たちからだと言うのです。モガル人からではないと」(p.55)。

このように言われた「インド」とは、先住民たちと亜大陸の大地を両方とも含んでいると考えていいだろう。住民とは、モガル人がやって来る前から住んでいた人々であり、バラモンを含むヒンドゥー教徒を主体とする人々のことだろう。彼はそれらを自分が所有するべきもの、「モガル人」の帝国が継続していれば、自分が支配階級の一員となっていたはずの所有の対象だと考えている。彼がムア夫人をエスコートしてイギリス人たちのクラブの入り口まで行ったとき、ムア夫人を門内に見送ってから彼は次のように考える。「だれかがこの大地を所有しているというならば、その所

有者はやはり自分なのだと思えた。無気力なヒンドゥー教徒たちが彼よりも前に住み着いていたとか、少数の冷淡なイギリス人が後に続いたからといって、そんなことはどうでもよかった」(p.15)。

そのような過去を想起して彼はその過去を救おう、「過去が戻って欲しい」(p.55) と願っており、彼がそのようにインド亜大陸に侵入したムガル帝国という過去を擁護しているかぎり、イギリスの帝国主義的支配 (British Raj) という現在を反帝国主義的な立場から批判することは、論理的に不可能なことだ。その批判的立場がないところで彼がフィールディングというイギリス人男性やムア夫人とアデラというイギリス人女性たちに近づくとすれば、英帝国という現在の支配者集団に擦り寄ろうという意図があるからだと解釈されても仕方がない。その意図が彼自身には無意識であるにせよ、明らかな兆候がある。すなわち、彼が英語を習得してほとんどイギリス人と変わりなく流暢に話しており、その事実にまったく疑問を抱くことがないということである。

注

1) P. N. Furbank, Introduction to the Everyman's Library 1991 edition, p.vi.
2) 浜渦哲雄『大英帝国インド総督列伝』(中央公論新社、1999年) p.165.
3) Furbank, op. cit., p.vi.
4) Everyman's Library 1957 edition, p. xxix.
5) 荒正人・近藤いね子編『フォースター』(研究社、1967年) p.145.
6) 同書、p.145.
7) 瀬尾裕『インドへの道』(ちくま文庫、1994年) の「訳者解説」p.544.
8) *A Passage to India* からの引用はすべて次の版による。E. M. Forster, *A Passage to India*, introduction by Peter Burra, notes by the author, Everyman's Library edition, 1968.
9) Rustom Bharucha, 'Forster's Friends' in Jeremy Tambling (ed.) *New Casebooks E. M. Forster* (Macmillan, 1995), p.129-30.
10) 高橋和久「インドへの二つの道」、『英国文化の世紀5――世界の中の英国』(研究社出版、1996年) 所収、p.172
11) P. N. Furbank, Introduction to Everyman's Library 1991 edition, p.viii.
12) 高橋和久、上掲書、p.172.
13) 瀬尾裕、上掲書、p.549.
14) Furbank, op. cit. p.ix.

15）Ann Margaret Ridler,「作品論・原文」、『E. M. フォースター』（英潮社、1980年）所収　p.48.
16）Everyman's Library 1957 edition.
17）近藤いね子「人と生涯」、近藤いね子編『フォースター』（研究社出版、1967年）所収、p.40.
18）歴史学研究会編『世界史年表』（岩波書店、1994年）による。
19）ホブズボーム『ナショナリズムの歴史と現在』（大月書店、2001年）p.197.
20）この多様性はその実情がどんなものか、多少は想像する手がかりになるヒントがあるのではないか。すなわち、21世紀をむかえて現実化した「ヨーロッパ連合（EU）」の存在である。今日EUに属する国々を合わせてひとまとめに「ヨーロッパ」と呼び、「ヨーロッパ・ネイション」ができたと仮定する。そうすると、今日の「インド」とは、その「ヨーロッパ・ネイション」よりも、さらに多様性に富んでいることが実態だからである。英帝国下では「インド」と呼ばれていた今日のパキスタン、バングラディシュを含めると、その多様性はさらに増大する。

具体的に数字をあげてみよう。EU加盟国は次第に増加しつつあり、原加盟国は6カ国であったが、2000年現在でEU加盟国は11カ国、2004年5月1日にはポーランド、チェコなど旧ソ連の影響下にあった東欧諸国を中心に飛躍的に増えて25カ国になる予定である。公用語もまた、11カ国語から20カ国語に増加する。これらの国々がすべて、それぞれ「ネイション・ステイト」としての資格を持つと認知されていると考えていいだろう。2004年に25カ国になった時点でのEU加盟国の総面積と人口をインドと比較してみる。統計数字は比較が可能となるために同じ2000年のものを用いることとして、中野尊正監修『世界地図』（国際地学協会2001年）掲載の資料による。なお、過去の人口規模については詳細が入手できないが、参考になる数字としては、『インドへの道』で、「注目すべきこの半島には一億七千万人のインド人がいます」（p.211）と述べられている。さらに、1930年ころのインドの人口については「3億」という数字がある（注24を参照）。

地　域　名	総面積（平方キロメートル）	人　口
2004年EU加盟国（ベルギー、ドイツ、フランス、イタリア、ルクセンブルク、オランダ、デンマーク、アイルランド、英国、ギリシャ、スペイン、ポルトガル、フィンランド、オーストリア、スウェーデン、ポーランド、ハンガリー、チェコ、スロベニア、スロバニア、エストニア、ラトビア、リトアニア、キプロス、マルタ）	394万9千	4億4394万人
インド	328万9千	9億7000万人
インド、パキスタン、バングラディシュの合計	422万8千	12億4700万人

21）E. W. サイード『文化と帝国主義1』（みすず書房、1998年）p.39.
22）サイード、上掲書、p.43.
23）ビパン・チャンドラ『近代インドの歴史』（山川出版社、2001年）p.131.
24）本田毅彦『インド植民地官僚』（講談社、2001年）、p.144.
25）同書、p.144.
26）クリストファー・コロンブスは西に向かって航海することで「インディアス（つまりインド）」に行けると考えたのであるが、その「インディアス」とは、オスマン・トルコの支配地の先に広がる東方の土地のことなのである。「東方の、地中海よりはるかに規模の大きな海上交易圏を、イタリア商人は「インド（インディア）という名で理解していた。「インド」とは、今日のインドだけではなく、インド洋から東シナ海にいたる大交易圏のことであったのである」（後藤明『イスラーム世界史』（放送大学教育振興1997年）p. 101）。
27）本田毅彦、上掲書、p.144.
28）サイード『知識人とは何か』（平凡社、1995年）p. 141.
29）本田毅彦『インド植民地官僚』（講談社、2001年）p. 168.
30）同書、p.9.
31）フォースターのManuscriptsが入手できなかったので、その一節を紹介した次の論文による。Brenda R. Silver, ‘Periphrasis, Power, and Rape in *A Passage to India*,’ in Jeremy Tambling （ed.）*New Casebooks E. M. Forster*,（Macmillan, 1995），p.172.
32）瀬尾裕訳『インドへの道』（359ページ）による。
33）Sara Suleri, *The Rhetoric of English India*（The University of Chicago Press, 1992），p. 132.
34）吉本隆明『「ならずもの国家」異論』（光文社、2004年）p.86.
35）岡田英弘『モンゴル帝国の興亡』（ちくま選書、2001年）p.125.
36）岡田、上掲書、p.126
37）藤原帰一「アメリカの平和――中心と周辺――」藤原帰一編『テロ後――世界はどう変わったか』（岩波新書、2002年）所収、p.229.